

## 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員 (主査)

中澤英彦



学位申請者 秋山真一

論文名 ロシア語の一致・不一致についての共時的・通時的研究

### 【審査の結果】

審査委員会は秋山真一氏の提出した学位請求論文「ロシア語の一致・不一致についての共時的・通時的研究」について論文審査と最終試験(公開審査)を行った結果、全員一致して博士(学術)の学位を授与するのにふさわしい研究であるとの結論に達した。

### 【論文の章別概要】

まず第1章において、本論文の目的と構成、対象規定、執筆の基本方針が述べられ、分析対象であるロシア語における一致の現象の多様性が包括的に記述される。章の最後で本論文のロシア語研究における位置づけが述べられている。すなわち、現代ロシア語のみならず歴史的観点からも研究すること、ロシア語統語論研究においてようやく開始されだした電子コーパスを用いる計量的な研究方法をとること、再現性を考慮して、収録語数はロシア語ナショナルコーパスに劣るものの、ウプサラコーパス The Uppsala Corpus of Modern Russian を利用すること、主語と述語との一致をめぐる現象の記述(実態解明)を主目的とするということである。この位置づけ・方針に基づき、以下、第2章、第3章、第4章では具体的な分析が行われる。

第2章はMRにおける一致の現象の実態の解明を目的とする。まず先行研究を渉猟し、研究者により扱われる因子(本論文の表記ではカテゴリー)が様々であるなど、分析される因子の断片性と手法の限界を看破し、因子を包括的に網羅し、それを形態論、統語論、意味論、語彙論、書記法に分類した。資料分析に際してはコーパス言語学の手法を援用する。本論文はロシア語統語論におけるコーパス言語学の先駆的研究である。分析対象として選定された時期は、ウプサラコーパスの資料が採取された1960年代から1980年代である。具体的には、ウプサラコーパスから採取されたデータ(880例)を計量的に分析し、一致の要因については統計学的手法( $\chi^2$ 二乗検定、多変量解析)を援用して整理し、さらにその因子間の影響の度合いについては多変量解析による回帰分析を行っている。

こうして得られたのが統計学的にも有効であると氏が見做す分類(表1)である。またこれを多変量解析の回帰分析を用いて、各因子が、述語の単数形・複数形の選択に与える影響の度合いについて調査し、それを階層の形【階層1】にまとめて提示している。

その結果、言語現実を反映するものとして述語の単数形・複数形の選択傾向を示す以下のような分類法が得られた。

【表1】 MRにおける因子分類と述語の単数形・複数形選択の傾向

形態論 述語の種類

動詞述語	単数<複数
分詞述語	単数>複数
形容詞述語	有意差なし

統語論 主語・述語の語順

主―述の語順	単数<複数
述―主の語順	単数>複数
主1―述―主2の語順	単数>複数

主格 markerの有無

複数主格 markerあり	単数<複数
---------------	-------

	主格 marker なし	単数>複数
	それ以外	単数<複数
意味論	数詞の意味論的数の大小	
	'д в а'	単数<複数
	'т р и'	単数<複数
	'п я т ь'	単数>複数
	'с т о'	単数>複数
	'т ы с я ч а'	単数>複数
	'м и л л и о н'	単数>複数
	数詞と結合する名詞の animacy	
	活動体	単数<複数
	不活動体	単数>複数
	主部内での概数表現の有無	
	概数あり	単数>複数
	概数なし	単数<複数
語彙論	述語が б ы т ь の変化形態か否か	
	б ы т ь	単数>複数
	б ы т ь でない	単数<複数
書記法	数詞の表記法	
	文字	有意差なし
	数字	有意差なし
	文字・数字の併記	有意差なし

#### 【階層 1】 MR における述語の単数形・複数形選択に与える因子別影響度

主述の語順> 述語が б ы т ь の変化形態か否か> 数詞の意味論的数の大小> 主格マーカーの有無> 名詞の animacy> 述語の種類> 概数表現の有無

第 3 章の分析および検証方法は第 2 章と全く同じであるが、分析の対象を OCS および OR とする。前者は、MR の規範形成の源流の一つであり、後者は MR の古期の形態である。MR、OCR、OR の選定の理由は、現代を代表する MR と現存する最古の文献である OCS、OR のデータの照合は、ロシア語史における最大の時間的振幅を捉えた対照研究になるという考えによる。具体的な分析対象は、マリア写本 (OCS 文献)、サヴァの本 (OCS 文献)、オストロミーロフ福音書 (OR 初期の文献)、アルハンゲリスク福音書 (OR 初期の文献) である。これらをヘルシンキ大学 University of Helsinki スラヴ・バルト言語文学科 Department of Slavonic and Baltic Languages and Literatures 内のキリル・メトディオス・コーパス Corpus Cyrillo-Methodianum Helsingiense と校訂テキスト、MR による聖書、日本語聖書を比較対照して分析を行った。

周知のように、OCS および OR には、MR ではすでに使用されない双数形が存在した。秋山氏は、OCS および OR の文献における述語の双数形の選択と各因子間の相関を調べ、その要因は数 2 との関連 (例、数 12 や数 200 との結合なども含む) のみによると確認した。つまり、主部に含まれる数詞が 2 と関連があれば、述語は双数形を取っていたのである。

一方、述語の単数形・複数形に関する異なる現われの存在 (本論文では揺れと表現) についての因子の解釈で、先行研究が複数の分類を認めている場合は、回帰分析を行い、先行研究の分類法を再整理、時には拡充している。さらに、多変量解析の回帰分析を用いて、述語の単数形・複数形の選択に与える、各因子の影響の度合いについて確認した。その結果、影響の度合いが OCS と OR においては異なり、それぞれ下の【階層 2】、【階層 3】のような異なる階層をなすことを明らかにした。

#### 【階層 2】 OCS — 述語の単数形・複数形選択に与える影響の因子別度合いの階層

主述の語順> 名詞の animacy> 述語が б ы т ь の変化形態か否か> 概数表現の有無> 数詞の意味論的数の大小> 述語の種類

【階層3】OR—述語の単数形複数形選択に与える影響の因子別度合いの階層

数詞の意味論的数の大小> 主述の語順> 述語の種類> 名詞の animacy> 述語が бытъ的变化形態か 否か> 概数表現の有無> 数の表記法

第4章はMR(第2章)とOCS(第3章)及びOR(第3章)の分析結果を対照し、MRに対するOCS、ORの影響を比較対照言語学的手法により明らかにすることを目的とする。

本章においては、秋山氏はMRにおける数詞句を含む述語の単数形・複数形の選択に与える各因子の影響とOCS、ORにおけるそれとを比較対照し、因子別に推測される歴史的な変化を分析した。

その結果、OCS・ORの時代から現代のMRにいたるまで、有意な差のないもの(下の①)と差があり、新しい傾向をみせるもの(下の②)に分かれることを解明した。

以下それを本論文に倣って示す。

①-a OCS・OR・MRと一貫してほぼ等しい揺れが認められる文のタイプ

- ・ (動詞の種類) 動詞述語をもつ文
- ・ (数詞の意味論的数) 'пять'に分類される数詞をもつ文
- ・ (名詞の animacy) 数詞が不活動体名詞と結合している文(名詞が顕在化しない場合は文脈から判断)

- ・ (概数表現の有無) 主部に概数表現を含まない文
- ・ (数詞の表記法) 数詞を文字で表記している文

①-b OCS・OR・MRと一貫して述語の単数形が優勢な文のタイプ

- ・ (述語 бытъ/bytiか否か) 述語が бытъおよびbytiの変化形態である文
- ・ (主語・述語の語順) 述語先行(述語—主語の語順)の文
- ・ (主語・述語の語順) 分割文(主語1—述語—主語2の語順)

①-c OCS・OR・MRと一貫して述語の複数形が優勢な文のタイプ

- ・ (主語・述語の語順) 述語後置(主語—述語の語順)の文

②-a OCS・ORでの単数形優勢から、MRで複数形も認められるようになった文のタイプ

- ・ (述語 бытъ/bytiか否か) 述語が бытъおよびbytiの変化形態である文
- ・ (数詞の意味論的数) 'сто'に分類される数詞をもつ文
- ・ (数詞の意味論的数) 'тысяча'に分類される数詞をもつ文
- ・ (概数表現の有無) 主部に概数表現を含む文
- ・ (数詞の表記法) 数詞を文字と文字以外との併記で表している文

②-b OCS・ORでの複数形優勢から、MRで単数形も認められるようになった文のタイプ

- ・ (動詞の種類) 分詞述語をもつ文
- ・ (動詞の種類) 形容詞述語をもつ文
- ・ (数詞の意味論的数) 'три'に分類される数詞をもつ文

②-c OCS・ORでの複数形優勢から、MRでほぼ等しい揺れになった文のタイプ

- ・ (述語 бытъ/bytiか否か) 述語が бытъおよびbytiの変化形態でない文

②-d OCS・ORでのほぼ等しい揺れから、MRで複数形が優勢となった文のタイプ

- ・ (名詞の animacy) 数詞が活動体名詞と結合している文(名詞が顕在化しない場合は文脈から判断)

また、秋山氏は、述語の種類・主語と述語の語順・数詞の意味論的数の大小・名詞の animacy・概数表現の有無・述語が бытъ/bytiの変化形態か否か、という6つの因子別の影響の度合いの歴史的変化を以下のように整理した。

① 主語と述語の語順: MR(強)はOCS(強)、OR(強)の影響度を維持

② 述語が бытъ/bytiの変化形態か否か: MR(強)はOCS(中)、OR(弱)よりも影響度が強化

③ 数詞の意味論的数の大小: MR(中)はOCS(弱)とOR(強)の中間の影響度へ移行

④ 名詞の animacy: MR(中)はOR(中)の影響度を維持、OCS(強)からは弱体化

⑤ 概数表現の有無: MR(弱)はOR(弱)の影響度を維持、OCS(中)からは弱体化

⑥述語の種類： MR（弱）はOCS（弱）の影響度を維持、OR（中）からは弱

最後の第5章では結びとして本研究の位置づけが再確認され、今後の展望が指摘されている。

#### 【論文の評価】

審査委員会が本学で課程博士号を取得するために必須と考えられる諸要件に照らして本論文をどう評価したかを、以下順を追って述べる。

第1に、研究対象の把握と問題設定が明確になされているか否かという点である。本論文では、明快な記述により研究目的と分析方法、今後の展望が述べられている。すなわち、OCS、OR および MR の資料を対象として、一致の現象の記述（言語事実の把握）を目的として、収集した資料を厳密な統計学的手法（ $\chi$ 二乗検定、多変量解析など）により検証した。統語論研究において電子コーパスを活用したアプローチはロシア語研究においては先駆的であり、研究は実証性と先駆性を備えた質の高い論文であると判断される。

第2に、対象領域の先行研究を十分に渉猟し、問題設定にしたがって批判的に検討、継承しているか否かという点である。本論文は、本論文に必要とされる範囲でロシアに限らず欧米の先行研究を先入観をもたずに検討し、従来のロシア語統語論研究における成果、主要な説を明確に把握した上で、その断片性、手法に疑問を投げかけ、自身の視点、手法を設定して論証を進めており、適切な記述を行っている判断される。

第3に、研究方法、データ処理、検証、結論への論述などを含め、言語学的な科学性が認められ、博士論文としての独創性が認められるか否かという点である。本論文で秋山氏は読むに値する先行研究を読んだ上で、従来の研究では、資料の収集方法が包括性と客観性に欠け、かつ資料総数が限定的であり、一致の現象に影響を与える因子が形態論、統語論、意味論、語彙論の分野で断片的、羅列的に述べられているに過ぎず、因子間の相関性に問題があること、したがって先行研究は言語現実にたいする解析力が乏しいことを看破した。先行研究へのこのような批判的検討に基づき本論は執筆されている。すなわち、本論では、MR および OCS、OR にはそれぞれウプサラコーパスおよびキリル・メトディオス・コーパスと校訂テキスト、MR による聖書、日本語聖書が用いられた。先行研究に比べて十分な量かつ客観性のある資料を用い、データ処理に際して科学的な統計処理の手法を援用し、言語現実を反映する包括的な階層性を提示している。先行研究に比べれば十分な客観性、科学性と包括性を備えた論文といえる。

従来のロシアにおけるロシア語統語論研究においてはコーパス言語学のアプローチをとり、厳密な統計学的手法を踏まえた研究は皆無に等しく、本論文は問題設定の範囲内では十分に説得的である。

第4に論文の体裁について、目次、注、参考文献などを含め論文の構成が適切であるか否かである。この論文はおおむね適切に構成されている。各章の冒頭でその章の問題の導入（包括的説明）の項目が設けられ、その章の問題の先行研究、扱う概念が記述され、それに資料の分析・検証が続くという構成を持っている。注記も十分になされている。

第5に、自立した研究者としての素質と将来性が認められるか否かという点である。秋山氏は博士後期課程進学後、学会誌を含む研究雑誌に単著論文7本、研究会発表（学会発表を含む）7回を数える。この一事から秋山氏がすでに自立した研究者として研究活動していることは明らかである。秋山氏は、研究の持続的遂行能力、データの数値処理能力、独創性に秀でていと認められる。

あえて本論文の問題点と思われる点を指摘する。まず、本論文のロシア語統語論研究における位置づけ、意義の記述が幾分明晰さを欠き、論理的裏付けも不十分であるのは、読む者に本論文の真価を伝えるに欠けていることである。次に、本論文は、OCS、OR、MR を対象とし歴史的な視点を目指しながらも、意図的に中世紀・近世ロシア語を除外し、当該現象の共時体系の構造的通時分析に至っていない。そのためロシア語における主語・述語の一致の問題を古代から現代への時間軸上に置き、秋山氏の姿勢が射程内に納める、未来像を予測する可能性が排除されている。また本論文は、電子コーパスを用いた、ロシア語統語論における先駆的コーパス言語学の研究であると標榜している。これは、確かに先行研究と比較する限りにおいては事実である。しかし、秋山氏の膨大な作業量を考えると幾分過酷な要求になるが、コーパス言語学的視点からすると、ウプサラコーパスによるMRの用例数が880というのは、何らかの一般化を主張するためには絶対数が少なすぎ説得力を弱めるであろう。ウプサラコーパスを質、

量において凌駕するロシア語ナショナルコーパスを秋山氏はあえて排除したが、本論文の最後に検証としてでも活用すれば一層説得力を増したであろう。OCS、OR についても資料選定と収集した資料数の問題で一抹の不安を感じさせる。さらに現在のコーパス言語学の限界も考慮すべきであった。秋山氏は本論では、一致の現象の科学的記述を目的とし、その現象の背後に潜む問題の説明は今後の課題としている。言語生活において話者は発話上のストラテジー、発話の趣旨から意識的に主語・述語の語順、それと関連して述語の単数形・複数形を決定することもありうるが、文脈を捨象した現在の電子コーパスのみではこのような問題は分析できない。秋山氏は提示する階層構造から外れた場合もあることを述べているが、このような場合こそ電子コーパスの限界を考慮し、考察をより深めることにより言語の実態が解明されるのではないか。秋山氏は、脱主観的説得力を増そうとするあまり、あえて数値のみをあげ、一致の現象における因子の頻度、影響度を数値化して提示するだけに止めているが、因子相互の関係の構文的、意味論的解釈まで踏み込むことが望まれた。

最後に記述の問題である。数値とその検証、科学性の追及が本論文の骨子であり、それゆえの記述の機械的単調さ、グロスや略語の用法の不明確さなどが散見され、誤字脱字が目立つという不備があった。ただし、これは論文の本質を決して損なうものではなく、今後の研究生活の中でおのずからは是正されるものと思われる。

以上、確かに目的を MR、OCS、OR における一致という言語現象の記述に限定した場合においても、本論文は構造的通時分析に至っていないという限界をもっている。発話者のストラテジー、提示された階層から外れる場合の解釈、因子相互間の解釈・分析も考察の対象とされていない。しかし、秋山氏は本論文では、構造的通時分析への第一段階として、まず言語現実の客観的資料の提示とその資料の厳密な統計学的手法による分析を課題としているのであり、本論文の対象、設定された目的の範囲内では十分に目的を達している。上記の問題は、審査で明らかになったように、秋山氏が本論で示した先駆的な方法論と検証方法の射程範囲、つまり氏の研究の第二段階にあり、氏の論文の今後の発展性、可能性を示すものであろう。

以上をまとめ、論文全般の評価について述べる。本論文はロシア語統語論の研究に積極的にコーパス言語学的手法を活用した先駆的研究であり、ロシア語研究に新しい研究アプローチの可能性を示している。次に得られたデータの統計処理に厳密な科学的な方法を適用したこと、それら手法と検定により、一致の現象について先行研究で断片的、限定的に述べられたに過ぎない階層を整理し、拡充した独自の包括的な階層を示したこと、MR のみならず OCS および OR を分析し、限定的ながらロシア語の時間軸上の変化の一面を闡明したことは高い価値を持つものといえる。これは、ロシア語学における研究方法での貢献とともに、ロシア語教育上の価値も含まれると思われる。本論文は、秋山氏が本論文で戦略的に抑制したロシア語ナショナルコーパスの利用、対象を中世、近世ロシア語にも拡大することにより、一致の現象を真に通時的構造変化の研究にする可能性も示唆する発展性に富んだ論文である。

総じていうならば、本論文は内容、構成ともに堅実なものであり、質、量ともに課程博士論文として十分な価値を有するものであると判断できる。秋山氏の今後の研究の展開が期待される。

以上より、審査委員会は全員一致して最初に述べた結論に達した次第である。